

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- I 10代とともに ～私ならやれる！ が、自分の背中を押す
- 4 祝！ 第35回記念 ラボ中国青少年交流
・ホームステイはじまり物語 その2
- 5 2025 夏の交流 PHOTO 速報
・ニュージーランド交流, 北米交流, オレゴン国際キャンプ, 韓国交流
・海外青少年受入れ
・ラボ高校留学帰国&出発報告
- 9 ラボ国際交流50年記念 交流のエピソード
ラボ・インターン紹介
- II Go Ahead! ～千葉県・高澤恵大氏
Information



横井 芽 (高2/愛知県・長田容子P)
もうひとつの家族

ホームステイ最終日の夕食のときに撮った写真。ホストファミリーが用意してくれたご飯はいつもおいしかった。
——カナダ・アルバータ州にて



10代とともに

茅野しのぶ

Kayano Shinobu

株式会社オサレカンパニー取締役。AKB48創設当初より衣装担当として活動。クリエイティブディレクターとして、数多くの衣装を手がける。AKB48グループ総支配人、AKB48劇場支配人も務めた。AKB48以外にも、=LOVEや≠ME・≠JOYといったアイドルから、声優、コスプレイヤー、2.5次元アーティストの衣装、さらに近年では学校制服・医療制服のプロデュースにも尽力。2025年に初の著書『アイドル衣装のひみつ〜カワイイの方程式〜』(Gakken)が出版された。



私ならやれる！が、自分の背中を押す

学生の頃からファッションに興味をもち、勇気をだして踏み出した一步が今に繋がったという茅野さん。ファッションのことだけではなく、10代の若者たちに意識してほしいことなど、すぐに実践できることを教えてくださいました。終始リラックスした雰囲気、参加者からの質問もたくさんで楽しい時間になりました。

子どものときは、いわゆる「普通の子」でした。中学生の頃から、ファッション誌を見るのが好きになって、よく読んでいました。ここにいる10代のみんなは、Instagramを見たりするんでしょうけど、あの頃は、ファッションにふれられるのはファッション誌しかありませんでしたからね。

高校生になると、アルバイトをして稼いだお金で、服を買うようになりました。当時はギャル文化の全盛期だったので「マルキュー(現: SHIBUYA109)」に行き、よく買い物をしていましたね。2年生になると、少し思考が変わって「原宿系」の服を着るようになりました。それで、青山のセレクトショップに通うのですが、高校生のアルバイト代では買えるものがあまりありませんでした。そこで、「自分で作ってみよう」と思い立ち、学校の遠足に自分で作った服を着て行ってみました。今思えば、技術がないので、とてもへた

で不完全な服でした。でもその服が、ダンスをやっている友だちの目にとまったんです。

「文化祭で3人でダンスをするので、衣装を作してほしい。ついでにヘアメイクもお願い」と言われ、時間はいくらでもあったので、引き受けることにしました。結果としては、3人とも満足してくれたようでした。

それからしばらくして、進路に関する三者面談がありました。担任の先生はとても厳しい先生だったので、少し身構えていました。しかし先生は、興奮気味に「文化祭のダンスの衣装、あなたが作ったと聞いてとてもすごいと思ったの!」と言ってくれました。親以外のおとなから褒められることが少なかったので、内心とても感動しました。そのときに、ファッションを仕事にしてもいいかもしれないと思ったんです。そこで、反対する親をなんとか説得して、服飾の専門学校に進むことにしました。

専門学校に入ってみると、「親がデザイナー」「親がアパレル関係なので、幼い頃から勉強している」というサブラレッドたちが大勢いました。私は普通の家庭で育ったので、最初は面食らいました。でも、なんとか自分の得意分野を理解して、その子たちに負けないようにがんばりました。

そうして学校で学んでいるうちに、日常で

着る服を作る「アパレル」よりも、クラブのファッションショーなどで着られる、「一夜限りの衣装」を作るほうが自分にはあっているなど思いはじめ、スタイリストのアシスタントとして、在学中から働くことにしました。

アパレルと衣装の違い

「アパレル」と「衣装」作りには、大きく2つの違いがあります。

ひとつは制作するスピード感です。今、お店に並んでいる服は、1年前に作られたものです。つまり、アパレルの服作りは、1年後のことを見越しておこなうんです。一方、衣装は2〜3週間で作ります。ミュージックビデオの台本や楽曲のイメージを受け取って、そこから制作をスタートさせ、2〜3週間後におこなわれるステージに間に合わせます。

もうひとつの違いは、服を作る目的です。アパレルは、「売れる服を作る」というのがもっともだいじです。お店に商品として並ぶものなので、在庫がいつぱい残ってしまったらたいへんです。なので、多くの人が買いたくなる、人気のでそうなデザインが求められますね。衣装は、コンセプトにあわせて、ステージで披露される楽曲にあうものを作ることが重要です。アパレルと衣装では、考え方がこのように異なるんですよ。



10代とともに



衣装を作るときに必要なのは、もらった台本などを読んで、どんな衣装か想像する力です。たとえば、ドラマに登場する野球部のユニフォームを作ることになったとします。台本に「夕暮れの練習場。ピッチャーはキャッチャーのほうを見た」と書いてあったら、それがどんなシーンなのかを想像するんです。この場合、新品のユニフォームでいいと思いますか？「夕暮れの練習場」ということは、それまで練習していて、土の汚れがついているイメージですよ。それにそのピッチャーが新人でなければ、着古したユニフォームである必要があります。さらに、前のほうのページを読んでみて、もしも前日が雨という設定だったら、「地面がぬかるんでいて、スパイクには土がたくさんついていませんか？」と、監督に確認するんです。こんなふうに、あたえられたものから想像する能力がたいせつな仕事なんですよ。

デザインは、かけ算

ステージ衣装のデザインをゼロから考えるとき、ほかの人が作った服を参考にしてしまうと、その時点で誰かのモノマネになってしまいます。すてきな服は、世の中にたくさんあります。SNSを覗けば、いくらでも見ることができるといいます。でも、それはすでに誰かが発表した作品なのです。

なので私は、服以外のところからイメージするようにしています。町で見かけた看板の配色だったり、たとえばこの部屋にあるラボのカレンダーの色味もかわいいなど、さっきから思っていました。そんなふうに、色味だけでなく形や質感なんかも、自分のなかにインプットしておいて、頭のなかの引き出しを増やしています。

実際に、私が衣装をつくる際の流れを、お

話します。

依頼者から衣装のイメージを聞くことから始まります。「黒っぽい、カッコいい衣装をお願いします」「ピンクを使ってかわいらしくしてください」というような、抽象的なイメージを伝えられることが多いです。私はそれを「かけ算」で考えるようにしています。「黒っぽい、カッコいい衣装」と言われたら、それに自分のモチーフをかけるんです。それはなんでも良いのですが、(インタビュー当日は雨)今日は雨が降っているので、カエルにしてみましょう。つまり、「黒っぽい、カッコいい衣装」×「カエル」ということです。こうすることで、オリジナルなデザインになります。

具体的に進めていくとすれば、カエルには水かきがありますよね？なので、腕の下に、水かきのようなものを付けてみたり、全体をヌメっとした黒いカエルみたいな生地で作ってみたり、「カッコいい」というオーダーなので、ガーターベルトを付けてみたりして、オリジナルな衣装を考えます。私はこれがデザインの基本だと思っています。

10代のみなさんには、今お話しした「カエル」の部分をどんどん増やしていったほうがいいです。それは、さっきお話ししたように、町で見かけた看板の配色でもなんでも良いんです。中学生には中学生のときにしか思いつかないことだったとたくさんあります。それはもしかすると、高校生になったり、おとなになったりしたときにふり返ると、くだらなく思えることかもしれません。でも、それで良いんです。とくに10代のうちには、探求心と好奇心をもって、引き出しをどんどん増やしていったほうがいいです。

SNSを見ていて、「私はぜんぜんいいと思わないけど、なんでこんなにはやっているんだ

ろう？」と思うことがあったら、なぜはやっているのかを調べるのだって、すごく良いことだと思います。世の中でなにが起きているかを知ることが、デザインのもとになるし、ファッションの道に進まなくても、役にたつと思いますよ。

できなくて当然

専門学校を卒業した私は、25歳で独立することができました。そんななか、秋元康さんのAKB48というプロジェクトに出会います。当時の私は若かったので、勢いのままに、「ほかの衣装デザイナーがいるかもしれないけど、断られて当然だと思って売り込みに行こう」と、行動してみました。すると、このプロジェクトに加わることはできたのです。たくさんの失敗もありましたが、そのときの一步が、今に繋がっています。「できなくて当然」と開き直ったことが良かったのだと思います。

今日は10代のみなさんに、このことを伝えたかったんです。若いうちは「できなくて当然」と思って行動してほしい。失敗を恐れず、逆に「できないので、みんな教えてください」というときがあっても良いと思います。怒られることもあるかもしれませんが、「怒っている人は、自分より経験があるので怒っているのだから、当然のことだ」と思ってください。怒られて当たり前なんです。そこで、「私はぜんぜんダメだ」と思わずに、



『アイドル衣装のひみつ
〜カワイイの方程式〜』
(Gakken)

10代とともに

教えてもらったことはしっかり覚えて次にいかせれば良いんだと、前向きに考えてほしいですね。

自分も、まわりも嬉しい

自己肯定感が高ければ高いほど幸せになれるとも思っています。今はSNSでみんなが繋がっていて、それはとても良い面もあるけれど、「あの人、自分よりもすてきな」「自分はぜんぜんできてないな」みたいに、ほかの人と比べて落ち込んでしまうこともあると思います。そんなときに、「その人にもすてきなところはあるけれど、私にだってこんな良いところがある！」と前向きに捉えてほしいんです。そのほうが、本来の力を発揮できるはず。なので、自己肯定感を高めて、実力以上のことを行動力で発揮していいです。「できなくて当然」と、「私ならやれる」が、行動力につながります。

実際に、こんな実験があります。参加者に、1部ずつ新聞を渡します。そして、とある問題を出題します。答えはその新聞のなかにあるので、探して、時間内に答えをもらうというものです。そして参加者に「あなたは、自分が運が良いと思いますか？ 運が悪いと思いますか？」と質問をして始めます。

すると、「運が良い」と答えた人の正解率のほうが、圧倒的に高くなったんです。つまり、「自分は運が良い」と思っている人は、「運が良いんだから、答えをかならず見つけられるはずだ」と思って前向きに取り組むため、正解にたどりつく人が多い。一方「運が悪い」と思っている人は、「私にはどうせ見

つけられない」と思いこんでしまい、しっかりと探さないで、良い結果がだせない人が多いということなんです。

でも、「私ならやれる」と思うことは、簡単じゃないですよね？ 私がしていたのは、親や友だちに「私の良いところを教えて」とお願いすることです。ちょっと恥ずかしいと思うけれど、ぜひ試してみてください。きっと、自分の良いところを教えてくださいます。「早起きが得意だね」とか「声が大きいね」とか、どんなことを言われても、少し自己肯定感を高められると思います。

では、今日ここにいる6人に共通しているいいところを言います。それは、「行動力があるところ」です。今日は雨が降っているのにも関わらず、自分で決めてこの会に参加し

ましたよね？ そんなふうを考えて行動できる10代って、とても能力があるなと思います。だから、自信をもって過ごしてくださいね。ほかにも良いところがあると思うので、ぜひまわりの人に聞いてみてください。まわりの人をお願いしなくても、「自分のことを一日一回かならず褒める」というのもおすすめなので、ぜひやってみてください。

そして、自分を褒めることができるようになったら、今度はまわりの人の良いところを見つけて、さり気なく褒めてみてください。褒められるのって、嬉しいですよね？ みんなを嬉しい気持ちにできることって、人間関係をつくるのにとても重要なことだと思うので、それが仕事にもいきてくると思います。

(文責：編集部)



※ 2025年10月17日(金)～28日(火)、大丸東京店で「AKB48 大衣装展 - 時代を彩った装跡 -」が開催されます

<https://www.daimaru.co.jp/tokyo/akb48/ishouten/>

インタビューを終えて

[取材協力]

東京支部のラボ・パーティ会員

伊藤祐佳子パーティ

●原田稀乃(中2) 将来は、映画でつかう衣装のデザインをしたいと思っています。今回のインタビューで、2つのことを実感しました。1つ目は、服の仕事には自分が思っている以上に種類があるということです。売人、つ

くる人、考える人。デザインだけではないことがわかりました。2つ目は、茅野さんが1日に1回自分を褒め、自己肯定感を高めると話してください、私もとてもたいせつにしていることだったので、同じ考えで嬉しかったし、間違えていないと思えました。

●高村怜奈(高3) 印象に残っているのは「未来の自分に誰よりも期待してほしい」ということばです。私に新しい考え方をあたえてくれるような貴重なお話を聞くことができ、あらためてこれからのについてしっかり考えようと思える経験となりました。

西田千尋パーティ

●堀越明日香(中3) 参加する前は、ネガティブな考えや不安な

思いが頭のなかをよぎることが多かったです。でも、茅野さんのお話の「学生はなにもわからない。知らない。が、あたりまえ」や、「自分自身を信じる」「自己肯定感をあげる」など、ものすごくありがたいことばをくださって、悩みごとがあるときも、話してもらったことばを思い出して、前向きに行動できたことがありました。

[取材日] 2025年5月

祝! 第35回記念 ラボ中国青少年交流

☆…コロナ禍における一時中断を経て、2025年春、35回目の訪問が実現したラボ中国青少年交流。現地手配を担当している旅行会社オフィス華林の林^{りん}淑英^{しゅけい}さんから紹介してもらう、中国交流のホームステイの歴史、後編です。

ホームステイはじまり物語 その2

北京市月壇中学の学生や先生たちが、交流初期にラボ会員宅でホームステイを体験したことが、現在のホームステイ交流につながっています。1988年夏、ラボからの招待を受けて、月壇中学から6名が来日しました。当時の物価指数を考えると、中国の一般の学生が国外へ行くのはたいへんなことでした。それまでのホームビジット（家庭訪問）の積み重ねと、この日本での体験をとおして「ホームステイ交流」への理解が深まり、翌1989年から中国でのホームステイが実現することとなったのです。



1988年、月壇中学から6名が来日。船で神戸港に到着した

私は、参加者自身が家庭に滞在する時間をどう有意義なものにしていくかがたいせつだと伝えてきました。しかし前号でお伝えしたとおり、当初ホームステイ先として選ばれる中国側の家庭は、成績優秀、電話がある、ひと部屋確保できる、トイレがある……など経済的、文化的に上流の家庭が中心で、「ありのままの一般家庭」とはいいがたかったのも事実です。親は仕事を休んでラボっ子のめんどうをみたり、車がない時代だったので、わざわざ職場から車を借りて観光に出かけたり、狭い自宅ではなく空いているマンションに宿泊することもありました。まだ「おまる」のトイレを使っていた家庭もあり、ラボっ子がびっくりしたとか、数々のエピソードがあります。

中国交流の歴史のなかでは、さまざまな困難もありました。初のホームステイ交流を終えた2か月後、1989年6月に天安門事件※が起きました。今後の交流について話しあうため、同年9月にラボ国際交流センターの理事長が現地を視察し、過去4回にわたる交流で「100名を超える小さな親善大使たちが残してくれた足跡」が関係者の心に刻み込まれていたことを確信したそうです。それ以外にも政府間のトラブル、SARSやコロナなどもありましたが、参加者一人ひとりがつくりあげてきた交流の歴史が、この交流を35回も継続できた理由のひとつだと思います。これまでに交流に参加した人数は、訪問・受入れをあわせて2,000人近くにもなります。

親元を離れ、異国の地で交流の場に立つのは、参加者にとって大きな冒険です。誰かに助けてもらうにも、自分が動かなければ、自分がことばを発さなければ解決しない。中国交流は10日間という短いプログラムですが、それでも「ひとりだちへの旅」であることを身をもって感じるでしょう。

中国と日本は、食生活や漢字など共通するところもありますが、違いもたくさんあります。お互いに理解しあうためには交流しなければなりません。私はいつも「百聞は一見に如かず」ということわざをつかって、この交流の意義を伝えています。自分の目で見て、体験して、考える。単純なことです、非常にだいじなことだと思います。



1992年、日本語と中国語によるラボ・ライブラリー『はだかの王様』発刊。月壇中学の保護者で、ラボ・チューターを受け入れた経験をもつスタッフのコーディネートにより、北京で録音がおこなわれた

北京や上海だけではなく、中国全土、あるいは世界中の子どもたちと交流して友情をはぐくむことで、戦争はなくなると思います。いまできることをするのが私たちおとなの役目です。ラボの中国交流の歴史をふまえて、さらに大きな輪が広がることを願っています。

(※) 1989年6月4日、北京で民主化運動を人民解放軍が武力制圧した事件

上海でもホームステイ交流が始まったことを報告する「ラボの世界」1996年春号



2025
夏の交流

PHOTO速報

体験をとおして学ぶ異文化

ラボ国際交流は10代の若者がおとなになる入口としての「ひとりだちへの旅」、そして「体験をとおして学ぶ」「異文化理解」をテーマにしています。楽しい経験だけではなく、ときとして異文化の壁にとまどうこともある国際交流。さまざまな違いを自ら乗り越え、より良い人間関係を結ぶ努力こそが、ひとりだちへの大いなる一歩となります。今夏の各プログラムのように写真ををご紹介します。

ニュージーランド交流

日程 7/23~8/15

参加者 86名



学校に通ったよ！



たくさんの友だちと出会えた！



北米交流 (アメリカ, カナダ)

日程 7/21~8/22

参加者 372名



いろいろ食べた!



同じ景色を一緒に見た



オレゴン国際キャンプ

日程 7/21～8/12

参加者 19名

プログラム

- ハイク、動植物観察、カヌー、化石採集、寝袋泊、博物館見学など多彩な自然体験、野外活動プログラム
- オレゴン州と周辺州の中高生と交流できるプログラム



大自然を満喫！

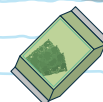


韓国交流

日程 7/22～7/31

参加者 16名

一緒に過ごした時間



海外青少年受入れ

家族でできる国際交流のひとつ、海外青少年の受入れプログラム。家族の一員として受け入れるなかで、相互に異文化を体験する機会となります。今夏も受入れ家庭で、パーティで、キャンプで、さまざまな交流がうまれました。

北米日本語研修

日程 6/13~7/11
参加者 11名

ラングブリッジ日本語研修

日程 7/12~8/3
参加者 15名

北米（1か月）

日程 7/11~8/7
参加者 26名

中国（北京市月壇中学）

日程 7/25~7/29
参加者 12名



Labo Summer



2024-2025 第37期ラボ高校留学 帰国しました

アメリカ、カナダに留学していた高校留学生
17名が、6~7月にかけて帰国しました。



2025-2026 第38期ラボ高校留学 出発しました

13名がアメリカ、
カナダへ出発しま
した。ホストファミ
リー宅から現地の
高校に通う留學生
活が始まっていま
す。





☆…ラボ国際交流は日本と海外の青少年とホストファミリーが時間をかけて交流を紡いできたプログラムです。そしてその裏には、この交流プログラムを支える受入れ組織の存在があります。

テネシー州の4Hのコーディネイターで、ラボとの交流に携わっている Steve Sutton 氏に、この交流にかける思いをうかがいました。

A Reflection on 50 Years of Exchange

I first had the opportunity to travel to Japan in 1988 as an outbound chaperone. That seems like a lifetime ago. Japan has changed dramatically since then and so has the world. The biggest difference? Technology.

Back in 1988, there were no smartphones, no Google Maps, and definitely no Suica cards to glide through the train gates. I remember standing in front of the massive maps at train stations, trying to figure out which ticket to buy and where I was even going. Most of the time, I had no idea what I was doing. I had to rely on the kindness of strangers—and in doing so, I made many new Japanese friends.

One memory stands out clearly: the obasan in my host family pressed a 10-yen coin into my hand as I left the house, just in case I got lost and needed to call her from a payphone. The only problem was that neither of us knew enough of the other's language to communicate much at all. That coin, though, was a symbol of her care—a gesture I've never forgotten.

Standing nearly two meters tall, I also didn't exactly fit in Japan. Literally. Doorways were too low, slippers were too small, and sleeves and pant legs always came up short. It took a few bumps on the head before I remembered to duck when entering a room! These challenges, though small, became part of the adventure, woven into the story of my first journey abroad.



Steve Sutton
State Coordinator
Tennessee



1988年夏、はじめて来日したとき

Like many first-time travelers, I was excited to try Japanese cuisine, explore new places, and bring home souvenirs. But when I returned home, I realized the Labo International Youth Exchange was so much more than a trip. It was about people, not places. About experiences, not sightseeing. About friendship, not just travel. Why is this exchange important? Because it creates opportunities for young people to learn, prosper, and discover themselves through connection with others. When American and Japanese youth experience life in one another's countries, they gain a deeper understanding of themselves, their own culture, and the wider world. They make friends for life, learning lessons no classroom or textbook can provide. Living with a host family allows delegates to experience daily life from the inside out. They come to understand the concerns, hopes, and dreams of a family, a neighborhood, a nation. Tourists will never know these things—only those who live as family do. Delegates return home changed individuals, with a new appreciation of their own culture and an expanded vision of the global community.



Tennessee first hosted a group of Labo students in 1982, but after a 20-year pause, we're thrilled to have returned to the program. Why now? Because the exchange is too important to leave behind. Participants develop leadership skills, self-confidence, and a wider view of the world. They're better equipped to thrive in a global society. Without the exchange, we were missing a powerful opportunity to help young people grow into thoughtful, compassionate leaders.

For 50 years, the Labo organization and the 4-H program have shared a strong, mutually beneficial relationship. Both organizations share a mission: to create opportunities for young people to grow, thrive, and become their best selves. Together, we are helping build a future shaped by curiosity, empathy, and cooperation. As I look back on my own exchange memories, I think of that 10-yen coin and the kindness behind it. The world has changed so much in fifty years—but the heart of this exchange has not. At its core, it is still about people opening their homes, their cultures, and their hearts to one another. And that is something worth celebrating for the next fifty years and beyond.

【要約】

1988年、ラボ国際交流の引率者としてはじめて日本を訪れました。当時はスマートフォンもGoogleマップも、Suicaもなく、駅でどの切符を買えばいいのか、どこへ行けばいいのかも分からず、人に頼るしかありませんでした。

ホストファミリーは、私が道に迷ったときに公衆電話から電話がかけられるようにと10円玉を渡してくれました。お互いにことばがうまく通じませんでしたが、その「10円玉」は思いやりの象徴でした。

私は身長が2m近くあるため、部屋に入るときはかがむということを覚えるまでに、何度か頭をぶつけました。こうした小さなできごと、私の思い出です。

私は日本での滞在を楽しみましたが、帰国後、ラボ国際交流プログラムは単なる旅行ではないのだと気がつきました。このプログラムでは、観光では決して知ることのない日常生活を体験できます。アメリカと日本の青少年がホストファミリーとの生活をとおして、自分自身、自分の文化、そしてより広い世界への理解を深めるのです。

テネシー州の4Hでは1982年にはじめてラボっ子を受け入れ、その後20年間の中断もありましたが、(2022年から)また交流が再開できたことをうれしく思います。このプログラムがなければ、若者が成長するたいせつな機会を逃していたでしょう。

ラボと4Hは50年にわたり、青少年の成長を願って協力してきました。私の交流をふり返ると、あの「10円玉」とそこに込められた優しさを思い出します。世界は50年間で大きく変わりましたが、この交流の意義は変わっていません。それは今後50年、そしてその先も続けていく価値のあることです。



2025年夏、テネシー州にステイしたメンバーと

2025
2026年度

ラボ・インターン紹介

新しく2名の
ラボ・インターンが
やってきました!

Brooklyn Jackson
ブルックリン・ジャクソン



出身: アメリカ (アイオワ州)
年齢: 19 歳
趣味: 絵を描くこと, 旅行,
日本語学習

配属: 2025年10月~2026年 1月 東京, 千葉支部
2026年 3月~2026年 7月 関西支部

Joshua Sierra-Davidson
ジョシュア・シエラ=デビッドソン



出身: アメリカ (バージニア州)
年齢: 18 歳
趣味: 料理, マンガ, バレーボール
など。チャレンジすることは
なんでも大好き!

配属: 2025年10月~2026年 1月 中部支部
2026年 3月~2026年 7月 神奈川支部

つながる原点

高澤恵大

青果店取締役



高校1年生の夏、ラボの国際交流でアメリカ・アリゾナ州に1か月ホームステイをしました。ことばも文化もわからないなかで、「どうしたら自分を好きになってもらえるか」を毎日考えて過ごしました。英語が通じなくても、笑顔や身振り、相手を知ろうとする姿勢があれば、気持ちは伝わる。そんな体験が、「伝えることっておもしろい」と感じるきっかけになりました。その後は、カナダでの1年間のラボ高校留学、カレッジリーダー活動での経験を経て、ことばだけではなく「心の向き」が相手に届くという感覚が、だんだん自分のなか



に根づいていきました。

大学卒業後、私は地元で家業の八百屋を継ぎました。仕事のなかでもとくにお客様との会話をたいせつにしています。どんなふうに食べたらおいしいか、誰が育てた果物か、そういう話をするなかで、「この人から買いたい」と思ってもらえる関係をつくるのが、私の仕事の本質です。商品売っているようでいて、じつは人と人との信頼関係がすべて。だからこそ、ラボで学んだ「自分から伝える」「相手を理解しようとする」姿勢が、毎日の商売にそのまま生きています。

とくに地元では、「あの人なら安心」「話しやすい」と思ってもらえることが、何よりの強みになります。また、仕事以外でも地域の若手経営者たちとイベントを企画したり、地元の魅力を伝える活動にも積極的に参加しています。立場や業種は違っても、たいせつなのはやっぱりコミュニケーション。誰とでも

しっかり向きあい、信頼関係を築いていくことが、地域全体を元気にする力になると信じています。ラボの国際交流で得た「関係を築く力」は、これからもずっと、私の真ん中にあると思います。



最後にひとこと。「伝えよう」と思う気持ちは、きっと誰かに届きます。まずはあなたの方法で、あなたらしく。

たかざわ けいた＝大森屋青果有限公司
(千葉県・佐藤志津子パーティ OB)

Information

国際交流親善事業

■第39期ラボ高校留学プログラム

◎選考試験

- ・9月 ELTIS2.0 試験 (オンライン)
- ・10月 ELTIS2.0 試験 (オンライン)

◎面談

- ・10月19日 オンライン型式 (首都圏以外)
- ・10月26日 対面型式 (首都圏)

■海外からの青少年受入れプログラム (予定)

◎ニュージーランド

(青少年12名+引率者1名)

日程: 12月13日・対面

～2026年1月4日 集合・帰国

◎第39期ラボ・インターン (2名)

日程: 9月末～2026年8月中旬

■S4-H Fall Coordinators' Conference

日程: 11月12日～14日

場所: シアトル

■理事会・評議員会

日程: 11月20日

上半期事業報告会

東京言語研究所

■理論言語学講座後期

※前期から開講講座2講座に加え、新たに8講座開催

座開催

日程: 9月29日～

各講座 19:00～20:40

■教師のためのことばセミナー

日程: 秋以降開催予定

■公開講座

日程: 11月1日

講師: 柴田元幸 (東京大学名誉教授/アメリカ文学翻訳家)

日程: 2026年1月10日

講師: 今井むつみ (慶應義塾大学名誉教授)

◎東京言語研究所の講座についてはウェブサイトをご覧ください

<https://www.tokyo-gengo.gr.jp/>